# 偉大なる医人としての中野操先生の追憶

山中太木

中野先生は、京都府医大卒業後病理学教室に入り、数年間を充実して角田教授の下で素晴らしい独自の業績を挙げ、医学に貢献されている。先ず将来皮膚科指向の基礎的研究とも見られる『実験的鉛中毒症における末梢神経終末の変化に就て』濱田稲積氏との共著として原著を公刊し、白粉の沿革を探り、持統帝の六年(一三五二)、沙門観成が自ら白粉を製して帝に奉献したこと、慶長年間に堺の商人銭屋宗安なるものが処方を大明人より伝習して、白粉の製造販売をして社会に流通するに至ったことを明らかにすると共に、鉛霜、官粉等と称して鉛塩類を主成分とし、白美人、ぱっちり、くも井、京の艶などが含鉛性なることを挙げつつ、平井金三郎教授の小児脳膜炎の鉛中毒に言及した詳細なる鳩実験の病理学的新知見は勿論、鋭い医史学的感覚を発揮されている。

次で、「肺臓に於ける腫瘍と結核との併発例、とくに癌腫と結核との合併に就て」野村恒一氏と共著論文を公表され、癌と結核の二大疾患が相乖離(カイリ)せる体質のものに発生し易いことの史学的証拠を挙げつつ、済生会京都病院長伊藤博士、府大外科横田教授の協力による精確なる症例の検討を詳細に臓器別に推進記載せられ、六十年を経た今日極めて重要なる基礎的知見を提供されていることは改めて敬服せざるを得ない。そのマクロ並びにミクロの探索記録は貴重にして価値高く、芳しく輝いている。

さらに、「悪性腫瘍の心臓転移に就て」白井正一氏との共著論文があり、何れも中野先生独特の観点と筆致による独自な表現形式をもって精確明快、整然たる論述は著者の人柄を如実に表現している。就中肉腫の心臓転移の観察においても従

来の学問的事大思想や旧来の陋習打破の筆陣を鋭くしておられる。

続いて、「輸血に由る肉腫移植に就ての実験的研究」は中野先生単独の論文として、加藤系家兎肉腫を用い多数詳細な実験記録として、その静脈血輸血によっては八十六%、動脈血の輸血では十二・一%の移植陽性であることを指摘し、肉腫は嫌気的性状を有することと共に酸素により移植率を低下せしめ得ることを実証し、日常医療における輸血実施上の注意を喚起している。

続いて「肺臓癌に就ての実験的研究」（昭和五年八月二十五日脱稿、『京都府立医大誌』第四巻五号所載）は、四八頁に及ぶ大論文で、家兎、猿、モルモットについて、テール・オレフ油等分液注入試験、ピチロール及びテール・オレフ油等分液注入試験、テール・シャルラッハロート油等分液注入試験、テール・パラフィン等分液注入試験、テールエキス予備注射後テール・オレフ油等分液注入試験、人脳乾燥粉末試食家兎にテール・オレフ油等分液注入試験、人脳乾燥粉末試食家兎にテール・パラフィン等分液注入試験、無水ラノリン試食家兎にテール・オレフ油等分液注入試験など極めて緻密なる実験を深重吟味しつつ反復実験を重ねて精密に精査し、総括して実験例所見の大観を肉眼的所見の一般、顕微鏡的所見の一般、さらに猿における移植実験、モルモットにおける移植実験を述べ、考按、文献、附図説明を加えてテールの静脈内注入により人工的に家兎の肺臓に腺表皮癌（アデノカンクロイド）を発生せしめ得たること、これは肺臓内に輸達し停留せるテール分子の慢性持続的刺激により発生せるもので偶発したものに非ざること、この発生に対しては独り刺激の性質並びに量が必要なるのみならず、また積属的、個体的乃至臓器組織的感受性、即ち素因が不可欠の要件たることを明確に立証されている。

この労作原著は後日病理学会山極賞に輝いたことは言うに及ばず、今日の肺癌激増の時代に医学の基礎知見として重要な意義を示すものとして尊重さるべきものである。

とくに私は、医人としての中野操先生の医学的貢献の第一にこの医科学的業績の労作を挙げ、勿論医史学的領野における中野先生の不滅の幾多の鴻業は、億川摂三、大矢全節、三木栄等諸博士と共に、杏林温故会や『医譚』の創設に始まる大

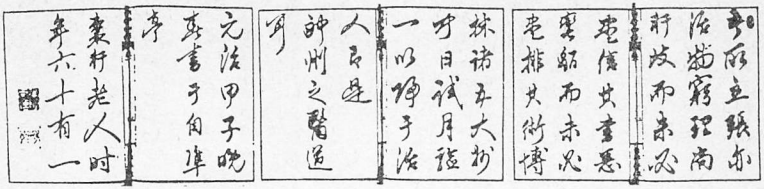

図 1　本間玄調著『内科秘録』の序文（元治甲子 1864，晩春）

図 2　津田家の倉から発見された華岡青洲筆の額（祖玄調が紀州から貰って帰ったものと考えられる）

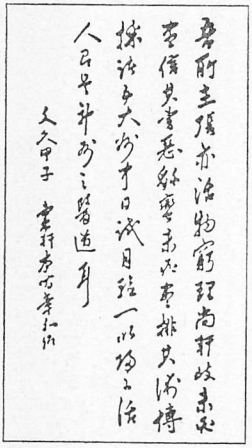

図 3　成子夫人の里の津田家の倉庫内から見付けられた軸書，文久甲子は1864年で2月改元，元治甲子と同年でこれは2月以前の書である．「蛮貊」が逆になって「而」が2字脱落した誤筆のために公表されず倉中に眠っていたものと解せられる．

阪における正しい医学文化の興隆発展は中野先生を中心として澎湃鬱勃たるものがあった。私も学友鈴木元造君と共に学生時代から『医譚』に親しみ、啓発されつつ竜海寺に誘われ、医家先哲を偲び、温故致新（敢て知新の個人的消極的表現ではない）、さらに自証確認、親験実施の示唆は、「和蘭医和」の伏屋素狄の腎尿生成機能実験における内山孝一、三木栄先生父子の勤勉努力など活きた実践教訓であり、適塾の保存確立を始め、賀川玄悦の産論顕彰、その他中野先生の貢献は大きい。医史学上の銘書大著の数々は繰り返して言うに及ばない。私は本間棗軒の兎毒（食兎中毒）の記載に連って、大原八郎の野兎病確立に対応し、四男大原梧楼博士成子夫人が実家津田家の倉庫から持出された青洲書の「活物窮理」の額と、棗軒筆の軸物の文久甲子、棗軒本間章和卿の書き違いを『内科秘録』序文に照して指摘されたのは実に中野先生であ

ったし、元治甲子の晩春は同年二月以後の僅かな間の出来事であったと推定する結果ともなって興味深く、『医学選粋』第八号の本間玄調書、医道訓の記録にまで発展するに至った。因みにこれを私の原著（『人文研究』第十号一～五三頁、一九七九年）の写真から再録すると図1～3の如くである。要するに中野先生は優れた稀に見る医人であり、私共若輩を鋭い感覚と弛みなき実践窮行によって教導せられた大恩人であると同時に偉大なる不滅の功労者であった。

謹んで先生の功績を追憶し、合掌して御冥福と、生涯苦楽を共にされた御夫人はじめ御遺族皆様方の御健祥を祈る。

（一九八七・十一・十・稿、文献省略）

（大阪府高槻市）

# 市井の学医中野操先生

大塚恭男

中野操先生がお亡くなりになられてから早くも二年を経た。先生が名著『皇国医事大年表』を著されたのは昭和十七年、先生四十五歳の時であることを思えば、先生の学者としての息の長さと、その倦むところの無かった究学の御生涯に尊敬とともに驚嘆の念を深くするものである。先生より三十年余り若輩の私にとって、先生はまず怖い先生であり、ついでは頼り甲斐のある大先輩であったが、甘えられる先輩というふうには遂にならなかった。元来小心者の私は、憧憬の念を持ちつつも、気易くお話しをうかがう勇気が無く、従って具体的な個人的つながりをいただくことができないうちに永久の別れをしなければならなかったことはまことに残念でならない。

先生は明治三十年に京都にお生まれになられたが、永く大阪にお住みになり、市井の開業医として生涯を送られた。